300-44
1200501366964
300
44

昭和新選碑法帖

大觀第二輯第十一卷

洛神賦二種合冊

始

723

洛神賦二種合冊

300
44

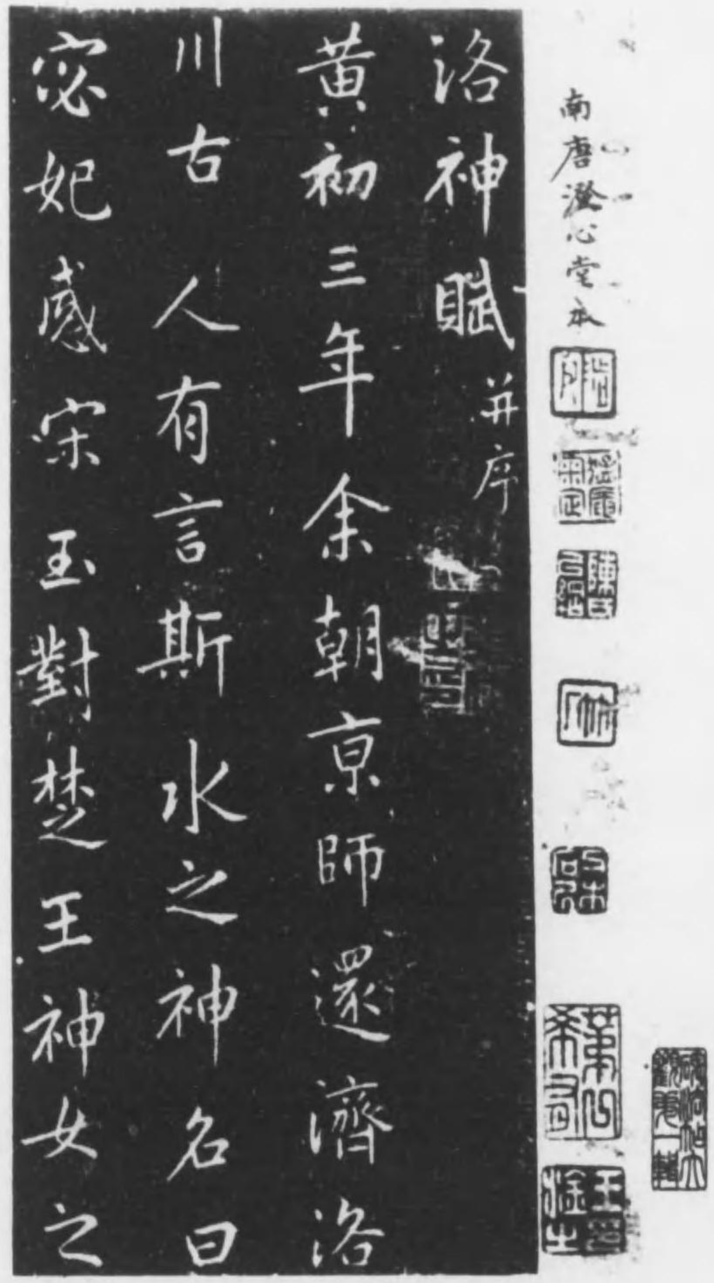
昭和新選

碑法帖大觀

第一輯
第十一卷

王右軍洛神賦并序

澄心堂本



洛神賦并序

黃初三年余朝京師還濟洛川古人有言斯水之神名曰宓妃感宋玉對楚王神女之

南唐澄心堂本

事遂作斯賦其詞曰

余從京域言歸東藩指伊
瀍越轘轅經通谷陵景山日
既西傾車殆馬煩糸乃稅駕

乎蘅皋秣駟乎芝田容與乎
楊林流眄乎洛川於是精
移神駭忽焉思散俯未
察仰以殊觀睹一要人于巖

之畔乃援御者而告之曰尔
有見於彼者乎人斯若
之御者對曰臣洛
神之白名則君王所見無

乃是乎其若臣願之
余之曰其形羽若馬
女若遊秋兮若
輕雲之巖蔽飄颻兮流風

迴遠而望之則若太陽
迫而之內若綠波
約延頃皓如雪芳
小社
合
內肖成腰如

華不御雲之脩
冊皓齒內鮮明眸善
睞輔承懷姿儀靜
然媚於眉廣平眉

圖披文兮珥之
華古戈金十之首紹明
以耀遠遊之文履曳綃
拖裾微逸蘭之芳藹兮步

於山隅於昆匊焉徙倚以人
敖以嬉左倚采旄右蔭桂
旗猗皓皓於神兮遺
之玄芝余情悅其淑美兮心

振蕩而不怡吾良媒以接
歡兮託微波而通辭願誠素
之先達兮解玉珮而要之嗟
佳人之信脩兮習禮而明詩

抗瓊瑤以和予兮指潛淵而
為期執眷眷之款實兮懼斯
靈之我欺感交甫之棄
言兮悵猶豫而孤疑收和

然而靜志兮中禮防以自持
於是洛靈感焉從倚彷徨
神光離合乍陰乍陽竦輕
軀以鶴立若將飛而未翔踐
樹塗之郁烈步蘅薄而
流芳超長今以永慕兮聊
哀厲而弥長尔乃衆靈雜
還命儔嘯侶或戲清流或

翔神渚或採明璫或拾
翠羽從南湘之二妃攜漢
濱之游女歎鄭交之弃佩
牽牛之獨雲揚輕袿之
旖旎脩袖以延伫體
迅飛鳧飄忽若神陵波
微步羅生塵動無常
則若危若安進○岳期為

注若通摶眄流精光潤玉
彩含緯未吐章英幽蘭
華容婀娜我忘沿於是
屏騎收風川后靜波馮夷

擊鼓女巫清狄騰文魚以
警乘鳴玉鸞以似逝六龍
儼其齊首載雲車之容裔
鯨鯢踊而夾轂水禽翔而為

衛於是越山泝過南岡行素
波迴清陽動朱脣以徐言
陳交接之大經根人神之
道殊怨盛年之莫當於

羅袂以接漣兮淚流襟之浪
浪悼良會之永絶兮哀一
逝而異鄉涕瀾以效愛兮
奴江南之明璫雖潛靈於太

陰長寄〻於天之包不恪
其所舍悵神宵而藪光於
兒背小陵高足注神所遺
情想像所望懷愁巢靈

體之復形御輕舟而上遡
浮長川而返思寥〻而增
慕夜耿〻而不寐霑繁霜而
至曙而涕夫而就駕吾將

歸乎東路攬騑轡以抗策
悵盤桓而不能去

永和十年二月六日
晉右將軍王羲之書

趙松雪洛神賦并序

秋碧堂本

碧石堂藏書

洛神賦 并序

黃初三年余朝京師還遂濟洛川
古人有言斯水之神名曰宓妃感
宋玉對楚王神女之事遂作斯

賦其詞曰

余從京師還言歸東藩指伊
瀨越轘轅緱通谷陵景山日既
西仆車殆馬煩尒乃稅駕乎
蘅皋袪馳乎芝田容與乎楊
林流眄乎洛川於是精移神駭
忽焉思散俯則未察仰以殊觀
睹一麗人于巖之畔尒乃援御
者而告之曰陵何人斯若斯之
艷也洛者對曰臣聞河洛之神

名曰窓妃則君王之所見也無
乃是乎其狀若何臣願聞之余
告之曰其形也翩若驚鴻婉若
游龍榮曜秋菊華茂春松髣
髴兮若輕雲之蔽月飄颻兮
若流風之迴雪遠而望之皎若
太陽升朝霞迫而察之灼若
芙渠出淥波襛纖得衷脩短
合度肩若削成腰如束素延
頸秀項皓質呈露芳澤無加

鉛華不御雲髻峨峨修眉聊
娟丹脣外朗皓齒內鮮明眸
善睞靡蔚承權瓌姿艷逸
儀靜體閑柔情綽態媚於
語言千載之下猶想像其
風聲

圖披羅衣之璀璨兮珥瑤
碧之華琚戴金翠之首飾
紈明珠以耀軀踐壹遊之文
履曳霧綃之輕裾微步蘭之
芳蘅芳步蹀躞於山隅於是

曰爲縱體以敖以嬉左倚采
旄右蔭桂旗擥騎皓腕於神濱
兮采湍瀨之奇芝余情悅其
淑美兮心揺蕩而不怡無良
媒以接歡兮託微波而通辭
願誠素之先達解玉佩而要
之嗟佳人之信脩美芳禮而明
侍抗瓊瑤以和予兮指潛川而
爲期執眷眷之款實兮懼斯
靈之我欺感交甫之棄言兮

悵猶豫而孤疑收和氣而靜
志兮中褫閉以自持於是洛靈
感焉從倚彷徨神光離合乍
陰乍陽竦輕軀以鶴立若將
飛而未翔踰椒丘之郁烏

步蘅薄而流芳超長吟以永
慕兮聲哀厲而弥長尔乃
翠靈雜遝命儔嚼侶戈瑤
清流戈瑤神洛戈采明珠戈
拾翠羽以從南湘之二妃攜漢

濱之游女歎瓠瓜之無匹洛
李生之獨雲揚輕袿之待靡
翳曖袖以延佇體迅飛鳧飄
忽若神淩波微步羅襪生
塵動無常所若驚鴻婉

蘇鳴玉鷹〻涉趍六龍儀之
蘇首載雲車之容裔鯨鯢
踊而夾轂水爲和而爲沛於
是越北阯過南巠行素領迴
潢揚動未胥〻徐言陳交接

之大經招人神之道殊怨感
年之莫當抗羅袂以攬沛兮
淚流襟之浪〻悼良會之永絶
兮哀一逝而異鄉〻哀激情〻
致愛獻江南之明璫雖潛靈

於太陰長寄〻於君王包不容
甚所舍悵神宵高蔽光於是
皆以陵高足佳〻面遺情於
像形望悵於一冀靈體之復
形沿輕舟而上泝浮長川而返

反里緜〻而悄步
霑繁霜而至曙命深夫而就
駕吾將歸乎東路攬騑轡
〻抗榮悵柏〻無而不孫生

子昂五為清夫書

洛神賦二種合冊解說

洛神賦は曹魏の諸王曹字子建の作りしもので、世に傳ふる所の王獻之洛神十三行を以つて有名となつてゐるものである。この獻之の洛神十三行は、頭尾の約三分の二强を缺き中間約三分の一の斷缺本である。

今回本大觀中に輯錄せる王羲之洛神賦は南唐澄心堂本中に輯刻されてゐるもので、他に餘り類例の見ない珍しい法帖である。王羲之の行書法帖と言へば、蘭亭、聖教、興福寺斷碑其の他集帖中に輯刻のもの三四を數へるに過ぎない。然るに一千字に餘る洛神全文の筆蹟であるだけ、而かも拓本が宋拓であるだけ、研究的價値の豊富なるものであることは斷言出來得る。羲之の眞蹟より鉤刻せるものか、或は羲之の集字であるかは輕卒に判斷し兼ねるけれども、法帖中の諸字を詳さに觀察するに、羲之の形貌をうかがひ得るに充分の價値をもつてゐるものである。王羲之が後世の書聖として果た又、草聖として三千年書道史上の龜鑑となり羅針盤となつて書道の王座を作つてゐる點より見て行書研究上、本帖の模範的價値の甚大なることを想起出來得ると思ふ。

趙松雪洛神賦は秋碧堂中に輯刻せるものより、載錄したるもので、前者と如何なる連絡のあるものかは斷定し得ないが、結体布置筆致等一脉相通ずるものある樣思はれて、研究上面白き對象である。趙松雪は實に宋以後の大家であつて後世書家中、これ位羲之の形貌をよく取入れてゐるものは無いと斷言して過言ではなからうと思はれる位である。これのみにて行書模範としての價値の充分なるに、更に羲之洛神賦と比較對照研究すれば行書研究の絶好資料となるは言を俟たぬ所であらう。

趙松雪略傳

趙松雪名は孟頫、字は子昂、松雪は其の號である。宋の太祖の子秦王德芳の後裔である。四世の祖伯圭第を湖州に賜ひ、湖州の人となる。松雪幼より頗る聰明にして、讀書して目過ぐれば輒ち直ちに之を諳誦したといふことである。文を作るに筆を操ればたち所に成るといふ、天才的の持ち主であつた。至之中兵部郎中を授かり後集賢直學士に遷る。延祐三年翰林學士承旨榮經大夫を拜す。後魏國公に封せられ、文敏と謚す。

松雪書は篆隸分隸眞行草共に古今に冠絕せざるなく、宋以後の大家として天下にその名が著れてゐる。天竺に僧があつて、數萬里より來つて其の書を求め、歸つて國中之を寶とした由、當時盛名推して知るべきである。

書は專ら古人を法となし、篆は即ち石鼓訊楚　隸は即ち梁鵠、鍾繇行草は則ち羲之獻之を法となし、絕極に達すと稱せられてゐる。

今日松雪の書として傳はるもの枚擧に遑なく、後世學者の松雪に學ぶ者亦、その數を知らない有樣である。殊に用筆暢調にして規格藝術初學研究規範として絕好のものたるは言ねく認むる所である。

洛神賦釋文

黃初三年、余朝京師、還濟洛川、古人有言、斯水之神、名曰宓妃、感宋玉對楚王說、神女之事、遂作斯賦、其辭曰、

余從京師言歸東藩、背伊闕、越轘轅、經通谷、陵景山、日既西傾、車殆馬煩、爾廼稅駕乎蘅皐、秣駟乎芝田、容與乎楊林、流眄乎洛川、於是精移神駭、忽焉思散、俯則未察、仰以殊觀、覩一麗人、于巖之畔、爾廼援御者而告之曰、爾有覩於彼者乎、彼何人斯、若此之豔也、御者對曰、臣聞河洛之神、名曰宓妃、則君王之所見也、無廼是乎、其狀若何、臣願聞之、余告之曰、其形也翩若驚鴻、婉若游龍、榮曜秋菊、華茂春松、髣髴兮若輕雲之蔽月、飄颻兮若流風之迴雪、遠而望之、皎若太陽升朝霞、迫而察之、灼若芙蕖出淥波、穠纖得中、脩短合度、肩若削成、腰如約素、延頸秀項、皓質呈露、芳澤無加、鉛華不御、雲髻峩峩、脩眉聯娟、丹脣外朗、皓齒內鮮、明眸善睞、靨輔承權、瓌姿豔逸、儀靜體閑、柔情綽態、媚於語言、奇服曠世、骨像應圖、披羅衣之璀粲、兮珥瑤碧之華琚、戴金翠之首飾、綴明珠以耀軀、踐遠游之文履、曳霧綃之輕裾、微幽蘭之芳藹、兮步踟躕於山隅、於是忽焉縱體、以遨以嬉、左倚采旄、右蔭桂旗、攘皓腕於神潢、兮采湍瀨之玄芝、余情悅其淑美、兮心振蕩、（盪ト通用）而不怡、無良媒以接歡、兮託微波而通辭、願誠素之先達、兮解玉佩、（玉旁モ同字）以要之、嗟佳人之信脩、羌習禮而明詩、抗瓊睇以和予、兮指潛淵而爲期、執拳拳、（眷々ニ同ジ）款實、兮懼斯靈之我欺、感交甫之棄言、兮恨猶豫而孤疑、收和顏而靜志、兮申禮防以自持、於是洛靈感焉、徙倚彷徨、神光離合、乍陰乍陽、竦輕軀以翟立、（翟ハ鶴山雉文選ニ鵠ニ作ルハ非ナラン）若將飛而未翔、踐椒塗之郁烈、步蘅（一ニ衡ニ作ル）薄而流芳、超長吟以永慕、兮聲哀厲而彌長、爾廼衆靈雜遝、（一ニ遝ニ作ル非）命儔（嚮ニ作ル非）嘯侶、或戲清流、或翔神渚、或采明珠、或拾翠羽、從南湘之二妃、（姚ニ作ル非）携漢濱之游女、歎鮑瓜、（一ニ蛇蝸ニ作ル）之無匹、詠牽牛之獨處、揚輕袿之綺（一ニ猗倚ニ作ル非）靡、翳脩袖以延竚、體迅飛鳧、飄忽若神、凌波微步、羅襪生塵、動無常則、若危若安、進止難期、若往若還、轉眄流精、光潤玉顏、含辭未吐、氣若幽蘭、華容婀娜、令我忘餐、於是屏翳收風、川后靜波、馮夷鳴鼓、女媧清歌、騰文魚以驚乘、鳴玉鸞以偕逝、六龍儼其齊首、載雲車之容裔、鯨鯢踊而夾轂、水禽翔而爲衛、於是越北沚、過南岡、紆素領、迴清陽、動朱脣、以徐言、陳交接之大綱、恨人神之道殊、怨盛年之莫當、抗羅袂以掩涕、兮淚流襟之浪浪、悼良會之永絕、兮哀一逝而異

300
44

鄉無微情以效愛兮獻江南之明當雖潛處於大陰長寄心於君王忽不悟其所舍悵神宵而蔽光於是背下陵高足往神留遺情想像顧望懷愁煢靈體之復形御輕舟而上泝浮長川而忘返思緜緜而增慕夜耿耿而不寐霑繁霜而至曙命僕夫而就駕吾將歸乎東路攬騑轡以抗策悵盤桓而不能去

（字ノ右ニ附シタル○ハ即顚字ナリ誤ラフタハ句ト誤認無キヨトヲ）

版權所有

昭和十年十二月十五日印刷
昭和十年十二月二十日發行

昭和新選 碑法帖大觀 第一輯第十一卷

洛神賦二種

編輯兼發行人 東京市麻布区霞町 田中和市
印刷所 大阪市東淀川区柴島二丁目九番地 玉石社 玉木印刷所 電話 七六六〇番
發行所 小石川区指ヶ谷町 電話 一五七二番 二五四三番 寧樂書道會
印刷人 大阪市東淀川区柴島二丁目九番地 玉木源郎

終